

檀の木の下で

——源氏物語篝火巻管見——

キー・ワード…巨木・東北・源融・河原院

村井利彦

(一)

篝火巻は源氏物語中において一番短い巻である。巻の位置関係から鳥瞰すれば、次に野分巻がある。そこでは老いた大宮も未体験の、すさまじい台風が吹きすさぶのであるから、篝火の揺れるこの巻は、まさに「風前の燈火」の感覚がたちあがることになる。少し引いて眺めれば、かなり洒落た構成の巻配列だと言える。が、巻の内実は、燦る光源氏の、篝火にさも似た夕顔の忘れ形見・玉鬘へのやる瀬ない恋情が、最高潮に達するのであって、作者は、そういう光源氏の内面の沸点を「琴を枕に添い寝」する場面として、切り取って読者に示している。

この琴を枕とするこの巻唯一の見せ場に、いささか気になる情景がある。今、そのことを追究してみたい。添い寝の部分もろとも本文を引くと、

五六日の夕月夜はとく入りて、すこし雲隠る、けしき、おぎのをともやうやうあはれなる程になりにけり。御琴を枕にてもろともに添ひ臥し給へり。かゝるたぐひあらむやと、うち嘆きがちに夜ふかし給ふも、人のとがめたてまつらむ事をおぼせば、渡り給ひなむとて、御前の篝火のすこし消え方なるを、御供なる右近の大夫を召して、ともしつけさせ給ふ。いと涼しげなる遣水のほとりに、けしきことに広がり臥したる檀の木の下に、打松おどろおどろしからぬほどにをきて、さし退きてともしたれば、御前の方は、いと涼しくおかしきほどなる光に、女の御さま見るにかひあり。御髪の手あたりなど、いと冷やかにあてはかなる心ちして、うちとけぬさまにものをつ、ましとおぼしたるけしき、いとらうたげなり。帰りうくおぼしやすらふ。

となる。

問題は「けしきことに広がり臥したる檀の木」である。この表現からすると、この檀の木は、右近大夫と篝火の台を覆って空に拡がっている見事な枝振りの木である。光源氏の視線をた



どって近くで見るとそれほどとは思われぬかもしれぬが、全体の絵を想像してみればこの檀、相当の巨木である。源氏物語の各巻から名場面を一つずつ選び取り色紙と葉書にしてみせた梶田半古は、篝火巻において、この檀に着目している。誰でも期待する「琴を枕に添い寝」する場面ではなく、木の下で篝火を焚く右近の大夫を彼は描いて見せた。精神性の高いこの半古の日本画は、我々の想像を裏切らない絵柄となっている。

が、この檀、さほどの巨木には描かれていない。それは多分、半古が檀の木の実態をよく知っていたからだと思われる。そもそも檀は、巨木なのか。

貝原益軒の『大和本草』によれば檀は人の背丈程の木である。

葉ハ橘ニ似テ厚ク、四時不凋、高キ事六尺に不過、枝多シ、挟ミテ籬トスベシ云々

有名な牧野図鑑をひもとくと、

北海道、本州、四国、九州などの各地の山野にはえる落葉の低木。時には高木ともなる。

（『改訂増補牧野新日本植物図鑑』）
とあって、残念ながら明快とはいえない。が、低木説を基調としていて、益軒の伝統を踏襲しているように見える。半古の意識も、このあたりにあつて、楠のような巨木には描かなかったのだ。

しかし、今、最新の「檀」解説文献を示せば、次の通りである。山野に自生し、樹高約5m。有柄の葉は対生し、楕円形で先が尖る。初夏の頃、淡緑色の四弁花をつける。両性花と雌性花の別があるが、各々別株につく。朔果ほぼ四角で熟すと淡紅色となり、四片に深裂し、中の赤色の種子が現れて美しい。又、秋の紅葉も美しい。東アジアの一带に分布し、材は強靱で弾力性があり、古代、車を作ったり、版木・細工用に適し、又、丸木弓（まゆみの語源）を作るのに用いられた（真弓・檀弓）。漢字、檀には、まゆみの他に梅檀の意味もある。

（寺山 宏著『和漢古典植物考』 八坂書房 平成十五年三月）

檀は人の背丈程の小木であるという先入見は禁物である。篝火巻の、檀のように下で篝火を焚いてもまだ余裕のある「五メートル」級の巨木もありうるのだ。

とは言い条、檀は最大で三メートル位の木であるという理解

が普通である。例えば、『日本国語大辞典』を例に引くと、

ニシキギ科の落葉低木または小高木。各地の山野に生え、観賞用に栽植される。高さ約三メートル。若い枝には四稜と白いすじがある。葉は柄をもち対生。葉身は楕円形または倒卵状楕円形で縁に細鋸歯（きよし）がある。五〜六月、葉腋から花柄がのび、淡緑色の四弁花が十数個集まって咲く。雌雄異株。果実はほぼ四角形、淡紅色に熟したのち四裂して赤い種子を露出する。材でこけしや将棋の駒を作る。昔、この木で弓を作ったところからの名。

とある。これが、現代日本の檀事情。五メートル巨木説は、あくまでも例外ではないか。半古が描いて見せた檀が、限界の大きさなのではないか。

(二)

昔はどうか。念のため、文献を当ってみる。まず、万葉集巻第七「弓に寄する」に二首見える。

陸奥の安達太良真弓弦はけて引かばか人の我を言なさむ
みなづち ぼそかはやま
南淵の細川山に立つ檀弓束巻くまで人に知らえじ
まゆみづか

いずれも、未だ人に知られていないが、知られてしまったら世間が大騒ぎすること間違いない魅力的な女性。これに、檀は

譬えられている。ならば、この檀は、可憐で美しく汚れなきイメージの小木であって、ここで檀を巨木のイメージとして捉えることは難しかろう。

『古事記』や『日本書紀』にも、檀は出て来る。応神天皇の末期、次期天皇位を巡る有名な確執の場面。長子大山守が檀に譬えられ謡われている。今、書紀の歌謡部分を引く。

ちはや人 菟道の渡に 渡手に 立てる 梓弓檀 い伐
らむと 心は思へど い取るらむと 心は思へど 本邊
は 君を思ひ出 末邊は 妹を思ひ出 悲けく そこに思
ひ 愛しけく ここに思ひ い伐らずそ来る 梓弓檀

実際の場面は、この歌謡にみるようなうろたしい兄弟愛とは異なる。次兄大鷦鷯尊から大山守の謀叛情報を得た弟宇治稚郎子が、一計を巡らし船頭に扮装、大山守の乗った舟をひっくり返し、宇治川に溺死させる。面白い場面ではあるが、今は、さしておく。

要は、この、宇治川の土手に立っている檀である。「伐る」と言っているところを見ると、決して細く小さい木ではなからう。また、これが大山守という天皇位を襲おうかという人物に譬えられているのだから、なやかな小木では格好がつかぬ気がする。が、「取る」といっているところを見ると、一捻りに引っこ抜くことが可能のようにも見てとれる。この檀、物凄い程の巨

木ではない、「伐る」と「取る」との選択に迷う程度の、せいぜい三メートルくらいの木と考えておく方が無難である。

古代の檀は、益軒の断案のように大人の背丈に限定することとは無理だろうけれども、少なくとも天を覆うような大木ではない。

も少し源氏物語の時代に接近してみよう。『古今』から『後拾遺』にかけて、檀の歌を列举すると、

手もふれで月日へにける白檀弓おきふしよるは寝こそねられね

(古今卷第十二恋歌二)

陸奥の安達のまゆみわがひかば末さへ寄り来しのびしのび

(古今卷第二十神遊びの歌)

陸奥の安達の原の白檀弓心こはくも見ゆる君かな

(拾遺卷第十四恋四)

みちのくの安達の真弓ひくやとて君にわが身をまかせつるかな

(後拾遺卷第十七雑三)

みちのくの安達の真弓君にこそ思ひためたることも語らめ

(後拾遺卷第十九雑五)

の如くである。いずれも、檀から産する真弓、つまり弓のイメージを援用した歌で、檀の木そのもののへの関心は薄い。

檀は紅葉も美しく、赤い実が四裂する姿も印象的な木であるにもかかわらず、この木そのもののへの無関心は、どうしたことか。

どうやら、檀は都ではほとんど見かけぬ木であって、遠い陸奥の木であるという万葉集以来の伝統的認識のためと思われる。

光源氏が夕顔を知らなかったように、貴族達は檀を知らなかったのだ。この、恐らくは誰も知らぬ弓の原木・檀を、紫式部は、六条院の丑寅町の壺に存在させ、しかも最大限の大きさに描いて見せた。何故か。

(三)

玉上琢弥は、この部分を解説して次のように言った。

「北の東は、涼しげなる泉ありて、夏の蔭によれり、前近き前栽、呉竹、下風涼しかるべく、木高き森のやうなる木ども木深く面白く」(乙女の巻)とあったが、ここに言う大きな檀の木は、この邸の造営前からあるのではないか。

(『源氏物語評釈 第五卷 角川書店 昭和四十年』)

流石の炯眼である。この巨木は、六条院造営時に植えられたものではない。元からここにあったものだ。「木高き森のやうなる木ども」の中から、檀を取り出し、こう述べた玉上の胸中の思念は、およそ次のように敷衍できょうかと思う。

そもそも、光源氏の六条院の西南の一町は、六条御息所の邸宅である。今はそこに御息所の見果てぬ夢を実現した娘・秋好

中宮が住み里邸としている。その西南の町と、紫上の住む東南の一町は、胡蝶巻で見られたように、舟で往来が可能となる池続きの構造となっている。だから、六条院造営に際しては、もともとの施設にかなりの改造は加えられていることは確かであるが、地形などの構造的改変にまでは及んでいないのではない。もともとのもので利用可能なものはかなり利用しているのではないか。母の里邸を改造して成った二条院と同じ伝で理解してよいのではないか。六条院の工事期間がおよそ一年間の突貫工事であつたらしいということも、この想像を支持するだろう。したがって、東北に位置する花散里の住む町にある「木高き森のやうなる木ども」を、都のどこから移植して森のような風景を造り上げたと考えるより、もともとあつた「森」を整備し、その中に御殿を設えたと考えのほうが自然である。檀の木も、いつ頃誰が最初に植えたかは知らないが、その森のなかにもとからあつたのだ。

と、考えると、われわれの思念はさらに次のように伸びて行くはずである。

この檀の巨木は、檀としては最大級のものである。ここまで大きくなるには、それ相当の年月が必要であろう。およそ百年近く経過していなければ話にはなるまい。篝火巻辺りの源氏物語の時代を、現実の時代に当てはめてみると、村上王朝のあたり。十世紀半ばと心得ておくのが穩当である。ならば、九世紀の中盤から後半にかけて、いわゆる「六歌仙」の時代あたりに、こ

の檀は植えられたものと考えられる。

六歌仙の時代、六条京極のあたり。広大無辺な豪邸に住んでいて、東北に尋常ならざる関心をもつ男が、この檀をその庭に植えたのだ。その男や誰。となれば、答えは答える前から分かっているようなものだ。

源融である。

『伊勢物語』八十一段に、融の話がある。ほぼ同時代の証言として重要だから全文を引用する。

むかし、左のおほいまうちぎみいまそかりけり。賀茂川のほとりに、六条わたりに、家をいとおもしろく造りて住み給ひけり。神無月のつごもりがた、菊の花うつろひざかりなるに、紅葉の千種に見ゆる折、親王たちおはしまさせて、夜ひと夜、酒のみし遊びて、夜あけもて行くほどに、この殿のおもしろきをほむる歌よむ。そこにありけるかたの翁、板敷のしたにはひありきて、人にみなよませ果ててよめる。

塩釜にいつか来にけむ朝なぎに釣する舟はここにより

なむ

となむよみけるは、みちの国にいきたりけるに、あやしくおもしろき所々おほかりけり。わがみかど六十余国の中に、塩釜といふ所に似たところなかりけり。さればなむ、この翁、さらにここをめでて、「塩釜にいつか来にけむ」とよめりける。

この場面で見える限り、融は今を時めく左大臣。六条の豪邸で、親王たちを呼び、菊と紅葉を愛でながら酒宴に興じ満悦の体である。一方業平はいえ、板敷きの下を這い歩く乞食同然、尾羽うち枯らした姿をさらし、それでも歌のトリを勤める。彼が抜きんできた歌人であることは衆目の一致するところであったためである。その彼が、ここは塩釜かと歌ったのは、實際融の河原院の池は海であつて、その風景は東北松嶋の景を模してあつたからである。また、『伊勢物語』では、業平は若い頃東北流浪の経験があることになっているから、この「塩釜にいつか来にけむ」は、相当の説得力があつたと理解すべきであろう。

「朝なぎに釣する舟はここによらなむ」いうあたりに業平の強い政治的願望がにじんでいるように見える。藤原基経全盛時代、べたなぎ政局の今、反藤原、親源氏勢力よ、河原院に結集せよ、と。若い日、惟喬親王を擁して一敗地に塗れた業平が最後に見ようとした夢が、源氏の棟梁ともいべき融であつたのではないか。という想像に駆られる話である。次の、八十二段から、その有名な業平と惟喬親王との交遊の章段が開始するのであるから、この段は、その額縁効果を持たされた段として理解することは不自然な話ではない。

融が東北にこだわりを見せたのは、彼が四十代の頃、陸奥・出羽担当の按察使中納言に任じられたせいであろうかと思う。彼の数少ない歌のなかでも、

陸奥みちのけのしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れむと思ふ我ならなくに

(古今和歌集卷第十四恋歌四)

は誰でも知っている百人一首歌。これも「みちのく」にこだわっている。

檀に話を戻そう。塩釜にさも似た河原院の目も彩な「紅葉の千種」のなかに、東北名産、かつ紅葉の美しい「みちのくの安達の真弓」がないことが想像できるだろうか。檀は、河原院の紅葉の目玉であつたと想像するほうがむしろ自然である。舟をしたて難波の海から海水を運ばせて、池に注ぎ込み、その海水で塩焼の煙を立たせたという風流男が、東北から檀を取り寄せなかったということは考えにくい。よしんばそういう事実がなかったとしても、後世の物語作者が、そう考えることは、何の不思議も生じない。

かくして、六条院丑寅町の檀は、六条河原院の昔を今に伝えるものとなる。かの木が巨木となつているのは、融から光源氏へと流れた歲月の量にはかならない。

(四)

融の死後、河原院は宇多院の領有するところとなる。院は寵妃・京極御息所褒子とここに遊んだ。ある夜、出現した融の霊のために肝を冷やされた一幕もあつたとか。この説話は、夕顔

卷に援用され、物の怪出現の場面となっていることは、よく知られている。

融が死んでからおよそ十数年後、貫之は、河原院を訪れている。

河原左大臣の、身まかりてのち、かの

家にまかりてありけるに、塩釜と言ふ

所の様を作れりけるを見て、よめる

君まさで煙たえにし塩釜のうら寂しくもなりにけるかな

(古今和歌集卷第十六哀傷歌)

彼は、融の夢の現場に立っているのだが、『伊勢物語』八十一段を意識してこの歌を見る時、貫之は、業平の見果てぬ夢を共有しているに違いないという思いに駆り立てられる。紫式部もそうだったのではないかと思いたくなる。

桐壺巻に實際貫之の名前が出てくることから分かるように、光源氏が夕顔を誘って赴いた「某院」は、このころの河原院を想定しておけばいいのではないか。そう思って読んでもらいいかこそ、作者は、いかにも露骨に融説話をなぞってみせたのだ。

とすると、こういう読みが可能となる。今、光源氏が玉鬘と一緒にいるこの篝火の煙り燃えるこの場所こそ、二十数年前、光源氏と夕顔がいた現場である、という読みである。もちろん可能性があるというだけの話であるが、こう思って読むと、この短い篝火巻は、ひとしおスリリングで面白い。檀のとりもつ

縁である。

常夏巻にあるように、光源氏は玉鬘のいる西の対に撫子を大量に植え「花園」としている。これも、雨夜の品定めの際、頭中将の話から得たイメージを強烈に反映したものと考えられる。夕顔の子である玉鬘と、夕顔が儚く消えた事件の現場にいる。玉鬘にとっては迷惑な話かもしれないが、光源氏にとって玉鬘は、夕顔の再生復活にほかならない。

光源氏は、河原院の上に、六条院を建てた。河原院は現実であるが、六条院はバーチャルである。この関係は、同じく融の嵯峨野別業である棲霞観と、光源氏が建てた嵯峨野御堂の関係と全く一緒である。光源氏は二重に融の夢を見る存在として規定されているのである。『伊勢物語』八十一段で、業平が見ようとした夢を、紫式部は『源氏物語』で光源氏に見させていると言ひ換えてもよからうか。

そろそろわれわれは、絵合巻で藤壺方および藤壺本人が繰り返し述べた断案の意味を了解してもいいのではないか。

世の常のあだごとのひきつくるひ飾れるに圧されて、業平が名をや朽すべき

「在五中将の名をば、え朽さじ」とのたまはせて、宮、みるめこそうらふりぬらめ年経にし伊勢をの海士の名をや沈めむ

(五)

源氏物語を通して読むと、藤原氏の零落振りに誰しも驚かされる。頭中将は位人臣を極めたが、光源氏のお零れにあずかりつづけた結果にはかならない。氏の長者たるべき嫡子・柏木は情念に殉じ無残に破滅した。太政大臣となり権力を握った嵯黒は、光源氏に尻尾をふる犬にすぎない。王朝風見鶏ともいえる政界遊泳術のみが取り柄のこの男に人望は望むべくもなく、未亡人となった玉鬘の苦勞の呼び水となつてしまつていようだ。柏木の弟で美声の持主である紅梅大納言が源氏物語における最後の藤原氏長者であるが、宿木巻で見せる愚痴は見苦しい限り。地位とて大納言、低過ぎる。彼の生涯の面目が、光源氏の聲咳に接したことだというのだから、なにをかいわんやである。柏木の正嫡・薫は、光源氏の子として封じ込められ、また世間で思われているほどの男ではないという内実を繰り返し語られる。宇治十帖は、冷静に読めば、薫の墜落史にはかならない。

一方、源氏はどうか。

夕霧は、太政大臣になるという滯標巻の予言は未だ実現してないけれども、そうなることはほぼ間違いない。長女は東宮妃で将来の中宮。政治の実権を既に握っている。紫上の死に水をとった明石女御は、今や中宮。皇子が三人あり、すでに一宮が東宮。二宮、そして三宮の匂宮と順に即位していきそうな雰

囲気である。もしそうなら、二人の天皇の母・彰子の栄華など物の数ではない。だいたい源氏物語は藤壺から始まつて秋好中宮、そして明石中宮と三代源氏が中宮であつて、藤原氏は見ると影も無い。

名乗れぬ藤原氏正嫡・薫は、蜻蛉巻で明石中宮の栄耀栄華を目の当たりにして、いみじくもこう思っている。

なほこの御あたりは、いとことなりけるこそあやしけれ、
明石の浦は心にくかりける所かな

源氏物語は確かにバーチャル世界であつて、物語そのものである。立つている現実が、源氏かたなし藤原道長望月の時代であつてみれば、この尋常ならざる現実との乖離、その距離こそが、源氏物語の価値なのだと思わざるを得ない。紫式部の源氏物語創作は、広大無辺に拡がり続ける現実感覚の喪失を、それと等量の虚構感覚でうめてゆく営為であつたと思われる。彼女は、これに成功したのである。

その乖離の始まりのあたりに、源融がいて、業平・貫之がいた。融の夢の莫大さが、源氏物語の質量を決定したと考えると分かりやすいかもしれない。巨大な檀の存在は、その夢の原点の在り処の表示として作者がさりげなく描いて見せたものだ、というこを、今回、論じてみたまでである。